

# 公開シンポジウム：大学入試の「英語」はどこに向かうのか

## 企画趣旨

南風原朝和（東京大学／広尾学園中学校・高等学校）

### 【経緯と現状】

大学入試の「英語」については、この数年、国レベルで大きく動いてきた。以下に主な出来事を列挙する。

2017 年 7 月 13 日

文部科学省が「大学入学共通テスト実施方針」を発表し、2021 年度入試から 2024 年度入試まで、各大学の判断で共通テストと英語民間試験のいずれか、または双方を選択可能とするとした。

2017 年 11 月 10 日

国立大学協会が「平成 32 年度以降の国立大学の入学者選抜制度—国立大学協会の基本方針」を発表し、国立大学は 2021 年度入試から「一般選抜」の全受験生に対して、共通テストと英語民間試験の双方を課すこととした。

2019 年 11 月 1 日

萩生田光一文部科学大臣が、共通テストの枠組みでの英語民間試験の導入を延期すること、および 2025 年度からの新制度導入を目指すことを発表した。

2021 年 7 月 8 日

文部科学省に設置された「大学入試のあり方に関する検討会議」が、2025 年度以降の大学入学共通テストでの英語民間試験の活用について、「実現は困難」とする提言を萩生田光一文部科学大臣に提出した。

2021 年 7 月 30 日

文部科学省は、2025 年度以降の大学入学共通テストに英語民間試験を導入することを断念することを発表した。

このように見てくると、共通テストの枠組みで英語民間試験を導入するか否かのみが議論の焦点であったかのように見えるが、この過程で、1990 年から 31 年間続いた大学入試センター試験が廃止され、2021 年度入試から大学入学共通テストが始まるという大きな変化があった。そして、その大学入学共通テストの英語では、大学入試センター試験で継続して出題されてきた発音・アクセント・語句整序などを単独で問う問題が出題されないことになった。また、個別入試における英語試験については、

「大学入試のあり方に関する検討会議」の提言に、個別入試における英語民間試験の導入に対して国がインセンティブを与えるような文言もあり、先行きは不透明である。

この現状をふまえ、これからの大学入試の「英語」はどこに向かうのか、また入学者選抜および高校以下の教育への波及効果の観点から、どこに向かうのが望ましいのかについて、大学入試センターおよび検討会議の当事者の方からの報告をふまえて議論し、理解を深めたいというのがこの公開シンポジウムの企画趣旨である。

#### 【登壇者の紹介】

大津起夫氏

大学入試センター試験・研究統括官。大学入試センター試験から大学入学共通テストへの移行期に、大学入試センターにおける試験問題作成を統括した。専門は心理統計学。日本テスト学会会員。

渡部良典氏

上智大学大学院言語科学研究科教授。「大学入試のあり方に関する検討会議」では唯一、英語および言語テストの専門家として参加した。日本言語テスト学会会長。日本テスト学会会員。

阿部公彦氏

東京大学大学院人文社会系研究科教授。著書『史上最悪の英語政策—ウソだらけの「4技能看板」』（2017年、ひつじ書房）は英語入試に関する議論に大きな影響を与えた。専門は英米文学。

松井孝志氏

都立高等学校、都内私立高等学校、地方私立高等学校教諭を経て、現在都内私立高等学校非常勤講師等。高校での英語教師の立場から、また、専門の英語ライティング指導の観点から、独自の問題意識をシンポジウムやSNSを通して発信してきた。

#### 【関連文献】

南風原朝和（編）（2018）. 検証 迷走する英語入試—スピーキングと民間委託 岩波ブックレット

東京大学高大接続研究開発センター（2018）. シンポジウム報告書「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって」

<https://www.ct.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2021/11/koudai-sympo2018-report.pdf>

東京大学高大接続研究開発センター（2019）. シンポジウム報告書「大学入学者選抜における英語試験のあり方をめぐって（2）」

<https://www.ct.u-tokyo.ac.jp/wp-content/uploads/2021/11/koudai-sympo2019-report.pdf>